

消費生活センターにご相談ください

消費生活知識 130

なくならない洗濯用パック型液体洗剤による事故 子どもだけでなく高齢者が誤って口に入れる事故も発生

事例1 子どもが洗濯用パック型液体洗剤を触っていて、フィルムが破れてしまい、中身が目に入り、充血した。目は自然に開けられるが念のため病院を受診した。

事例2 保護者が洗面台の掃除をしていたところ、そばにいた子どもが洗面台の下に置いてあった洗濯用パック型液体洗剤を容器から取り出し、口に入れていた。洗剤を飲み込んだようで、ぐったりしていたため、すぐに救急車を呼んだ。嘔吐した後、点滴をして容体は落ち着いていたが、検査入院となった。

事例3 洗濯用パック型液体洗剤がくっついていて、はがそうとした途端、フィルムが破れて中身が目に入った。

事例4 認知症のある高齢者が、洗濯機付近に置いてあった洗濯用パック型液体洗剤を食べ物と思い、誤って食べてしまった。嘔吐と下痢が続き病院に搬送されたところ、洗剤による界面活性剤中毒から誤嚥性肺炎になり入院となった。

パック型液体洗剤は、子どもだけでなく、不用意に触ってしまう恐れのある方の手の届くところに特に床や洗面台の下などには置かないようにしましょう。対策が困難な場合には、使用しないことも検討しましょう。

パック型液体洗剤を使用したあとは、必ず箱のふたや袋のチャックをしつかり閉めて、子どもなどの手の届かない場所にすくなく戻すことを習慣にしましょう。開けにくい形状の容器であっても油断は禁物です。

パック型液体洗剤を濡れた手で触ったり、ふたを開けたまま保管すると洗剤同士がくっついてはがそうとしてフィルムが破れて中身が飛び出すこともありま。濡らさないように気をつけましょう。

子どもや高齢者などが誤って口に入れてしまい、洗剤などを飲み込んだ可能性のある場合や、目に入り、よく洗い流しても異常を感じる場合には、商品の成分が分かるパッケージなどに写真に撮ったものでも構いません。を持って医療機関を受診しましょう。

※パック型液体洗剤：濃縮液体洗剤を水溶性フィルムに包んだ洗濯用パック型液体洗剤

▼相談日時 月～金曜日（祝日・年末年始を除く）午前9時～正午、午後1時～4時

▼相談場所 上三川町消費生活センター（役場1階 地域生活課内）

▼相談専用電話番号 0866-91553

まずは、お電話を。消費者ホットライン1188でもつながります。

上三川ごぼれ話 第20話 「上三川の交通網とバス編」

明治の文明開化以降、馬車や人力車などの輸送手段の普及により、道路交通網が急速に整備されていきました。そして、鉄道や自動車の出現によって、道路網はさらに拡大していきました。

さて、県内で自動車が初めて登場するのは大正元（1912）年のことで、その翌年に鹿沼の自動車会社が6人乗り自動車4台を買い入れ、鹿沼―栃木間・鹿沼―宇都宮間の乗合自動車の運行を始めました。

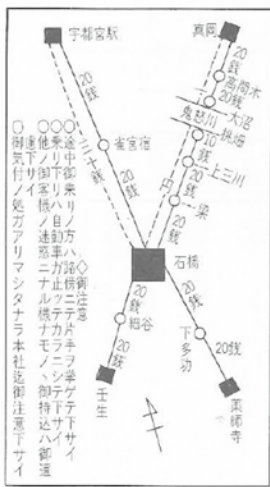
これを皮切りに各地で自動車会社が設立され、急速に乗合自動車の運行が増加しました。その背景には第一次世界大戦による好景気と戦後に米國製自動車の輸入が増大したことが挙げられます。

大正8（1919）年、石橋駅前には合資会社石橋自動車商會が設立され、T型フォードの幌型5人乗りでの運行を始めました。大正15（1926）年当時のバス運行時刻表によれば、石橋を起点に、宇都宮間1日7往復（片道料金30銭※）・桃畑間6往復（50銭）・薬師寺間8往復（40銭）・壬生間7往復（40銭）でした。なお、石橋―真岡間の運行では、鬼怒川の渡船のため、一度乗り換える必要がありました。

その後、石橋自動車商會は石橋自動車株式会社へと名を変え、路線拡大を続けました。昭和16（1941）年、石橋自動車（株）は関東自動車（株）と合併し、町を通る路線は宇都宮―屋敷―上三川間・石橋―上三川―東汗間・宇都宮―雀宮―東汗間・上三川―真岡間の4路線になりました。

現在のバス路線の基礎は、この頃にでき上がったことが分かります。

※当時の物価の参考として米10kgで、50銭前後でした。



石橋自動車路線略図（大正15年）

▼問い合わせ先 生涯学習課 文化係 ☎33510